平成２８年度第１０回教育委員会定例会　会議録

◇　**開催年月日**　平成２９年１月２６日（木）１４時４０分開会
１５時４５分閉会

◇　**開催の場所**　教育委員会室

◇　**出席者**

教育長	杉元　羊一
委員（職務代理者）	津曲　貞利
委員	髙島　まり子
委員	桃木野　聡
委員	立元　千帆

◇　**説明のため出席した者の職氏名**

管理部長	星野　泰啓	教育部長	藤田　芳昭
総務課長	橋口　訓彦	施設課長	間世田　敏
文化財課長	川原　祐明	美術館副館長	山西　健夫
図書館副館長	馬立　由紀	学務課長	中﨑　新一郎
学校教育課長	谷口　幸一郎	保健体育課主幹	竹下　公博
国体準備室主幹	上堀内　強	青少年課長	山下　敦宏
生涯学習課長	大堂　洋	少年自然の家所長	永吉　眞一
中央学校給食センター所長	宮里　弘見		

◇　**書記**

総務課主幹	土屋　幹雄	総務課主査	久家　加奈子

◇　**議事日程**

１　開　会

２　会議成立の宣言

３　会議録署名者の指名

４　会議の公開等について

５　議　案

定第３６号議案　平成２８年度鹿児島市一般会計補正予算（教育委員会関係分）に係る議案についての意見に関する件

定第３７号議案　住居表示の実施に伴う関係条例の整理に関する条例制定（鹿児島市立学校条例の一部改正）に係る議案についての意見に関する件

６　報告事項

(1)　鹿児島市指定文化財の指定に係る鹿児島市文化財審議会への諮問について

(2)　市議会関係の審議等について

７　協議事項

(1)　本市におけるグローバル人材の育成について

８　その他

９　閉　会

◇　会議要旨

１　開会

教育長　　ただいまから、平成２８年度第１０回教育委員会定例会を開会いたします。

２　会議成立の宣言

教育長　　本日は全員出席しており、定足数に達しておりますので、会議は成立しております。

３　会議録署名者の指名

教育長　　本日の議事日程は、お手元に配布したとおりです。本日の会議録署名は、津曲委員と立元委員にお願いいたします。

４　会議の公開等について

教育長　　次に、会議の非公開についてお諮りします。定第３６号議案及び３７号議案は、市議会提出前の意思形成過程の案件でありますので、非公開の扱いとしたいと思いますが、ご異議ありませんか。

（異議なしの声）

教育長　　ご異議もないので、そのように取り扱います。

５　議　案

定第３６号議案　平成２８年度鹿児島市一般会計補正予算（教育委員会関係分）に係る議案についての意見に関する件

同　意

【本議案は非公開】

～～～～～～～～～～～～～

定第３７号議案　住居表示の実施に伴う関係条例の整理に関する条例制定（鹿児島市立学校条例の一部改正）に係る議案についての意見に関する件

同　意

【本議案は非公開】

～～～～～～～～～～～～～

６　報告事項

(1)　鹿児島市指定文化財の指定に係る鹿児島市文化財審議会への諮問について

教育長　　次に、報告事項(１)について、説明をお願いします。

事務局　　報告事項関係資料（１）をご覧ください。鹿児島市指定文化財の指定に係る鹿児島市文化財審議会への諮問につきまして、ご報告申し上げます。１の内容でございますが、下福元町、慈眼寺駅北側の不動寺遺跡から出土した破鏡(はきょう)及び仿製(ぼうせい)鏡(きょう)を鹿児島市の指定有形文化財（考古資料）に指定することについて、文化財保護条例に基づき、２月３日に開催予定の市文化財審議会に諮問しようとするものでございます。２の指定しようとする理由でございますが、金属製品の少ない弥生時代から古墳時代のものと考えられる出土品で、青銅鏡は権威や身分を示すものと考えられ、この地区に有力者がいた可能性を示す貴重なものであり、本市では初出土、県内では破鏡は２例目、仿製鏡は９例目と出土例も極めて少ないことから、文化財的価値は非常に高いと考えております。出土品を写真で示してありますが、左の破鏡につきましては、意図的に割った中国製の青銅鏡を磨き、穴をあけるなどして、装身具等に転用したものと考えられております。

右の仿製鏡につきましては、日本で出土する青銅鏡のうち、中国鏡を模倣して作られるものでございます。今後の予定といたしましては、文化財審議会の答申を受け、２月の教育委員会定例会で改めて議案としてお願いする予定でございます。

以上で報告を終わります。よろしくお願いいたします。

教育長　　ただいまの説明につきまして、委員のみなさんから何かご質疑はありませんでしょうか。

（なしの声あり）

～　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～

(2)　市議会関係の審議結果等について

教育長　　次に、報告事項（２）について、説明をお願いします。

事務局　　報告事項（２）の市議会関係の審議等について、ご説明いたします。教育委員会関係の審議が行われたものとしましては、１月１６日から２０日の間で開催されました、第五次総合計画後期基本計画及び地方創生に関する調査特別委員会におきまして、総合計画関連の審査が行われたところでございます。

その中で出てきた意見としましては、地方創生の実現に向け、将来の担い手を育成する教育についても大きな柱の一つであることから、そのような視点を持って取り組むべきであるという意見をいただいたところでございます。

以上が市議会関係の報告でございます。

教育長　　ただいまの説明に対して、何かご質疑ありますでしょうか。

今事務局からありましたように、地方創生と教育ということでしっかりと基準を持って進めていくべきということでした。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

7　協議事項

(1)　本市におけるグローバル人材の育成について

教育長　先ほど総合教育会議でもありましたグローバル人材の育成について、改めて教育委員会として感想も含めて意見交換ができればと思います。

教育委員会として外国語活動、あるいは英語科の教科化、また先生方の資質向上であるとかＡＬＴ・ＡＥＡの活用、今後そういったところで新学習指導要領で大きく変わるというか変えなければならないこと等、今検討しているレベルで構わないと思いますが、何かありますか。

事務局　英語教員の指導力ということと英語の資格、能力等で本市の状況を見てみますと小学校で英検の準１級以上を持っている教員というのは現在２人、中学校では２９．７％ということで４６人、高等学校で１１人で５７．９％ということで、これを見ますと中学校、高等学校においては準１級程度、ＴＯＥＩＣで言うならば７３０点程度というようなデータがございます。

それから中学生の英検３級以上、高等学校におきましては準２級以上ということですけれども中学生は１，１４７人の子どもたちが、高校生は玉龍の子どもたちがほとんどになるんですけれども２３０人のうち６４人が準２級以上となっています。商業、女子高の場合は商業英語等がございますので資格として見た時には少し違うのかなと。

一番私どもが考えているのは英語の「必要化」が一番であろうと。英語を英語のために習うのではなくて、英語を使って何をするのかということで、今日学校訪問でお二人の委員に授業を観てもらったわけですけれども、ＡＥＡの先生で外国籍の方が３人いる中の１人だったんです。あるときにビンゴゲームをやっていたんですけど、ビンゴというゲームを英語を通してやっているというところはよかったんです。ただ、子どもたちがせっかくたとえばサイエンスと言った時に誰か訳す子がいて。「理科だよー」とか「音楽だよー」とか言ってしまうんですね。そうなってしまうとそこでもう日本語の活動に、ただのゲームになってしまう。

私が英語の先生方によく話をするんですけれども、たとえばあるときにうちの子どもたちを連れて食事に行ったんです。近くにお母さんがいまして、メロンソーダが出てきたんです。そうするとお子さんが「グリーン」と言ったんです。「そうだね、英語よく知ってるねー」と。とそこまではよかったんです。そこで「赤は？」「レッド」「黄色は？」「イエロー」とやりだしたんですね。これが何がおかしいのかといったときに、やはりレッドはレッドなんですよ。赤をレッドと訳が始まった時にこれはもう英語教育ではないと。私たち日本人が英語を話すときに一番の課題になっているのがたとえば「今から英語を話しなさい」と言われた時に日本語でまず考えるんですね。日本語を考えて、その日本語を英語に文法的に正しいのはこうじゃないかなーということで文章を作って話すんです。そうするとテンポがずれていきます。会話が成り立ってい

かない。子どもたちに大切なことはまず自分で考えて頭の中に浮かんできた英語を話してみようよと。思ってることを何でもよいから話して、それをつなげること。そこがまず大事だよと。そして自信を持たせる。そのためには目的が何かあってその目的を達成するための英語教育でないといけないですよね、と。これを子どもたちにも先生方にも話をしているところです。

どんどん慣れていくと頭の中で考えなくても英語は出てくるようになりますが、話をしていると途中で分からない単語が出てくるんです。この間は「認知症」という言葉が出てこなくて、なんだったかなと思いながら説明をしたら相手が英語で返してくれたんですけど、そういうことなんです。

先ほどの研修の話は小学校の話ですが、中学校の先生も中央研修に行っておりまして、３年間で規模的には全員に出てもらおうと計画を立てているところです。

教育長　今の話も含めて先ほどの総合教育会議での話も含めて、教育委員会として義務教育の多様性、専門性、キャリアアップをするチャンスということでいろんな工夫が必要かと思います。改めて教育委員会としてこういうことを、というような具体的な方向性についてのご意見ありますでしょうか。

委員　今日はグローバル人材の育成ということで総合教育会議でお話がありまして、必ずしも英語だけに特化した話ではなかったと思うんですが、やはり教育委員会として取り組むときにはそういう人材育成と、３２年度からは英語教育がスタートするということになっているので、そこをどういう風にうまくコラボさせるのかなというところが個人的にはすごく気になっています。

先ほど門田さんが英語アレルギーを増産しているのではないかという懸念を持っているとおっしゃったんですね。今までずっと中学校から英語が入ってきてましたけど、そこでつまずいちゃうと英語嫌いになるんですね。それが小学校におりてきて５、６年とか３、４年のレベルで既に英語嫌いの種がまかれたりしたらどうなのかな、と。あまり後ろ向きに考えたくはないんですけれども、やはりそこのところを一番気にしています。文科省は早く始めれば実が上がるという非常にある意味単純な発想で作っているところがあるんですけれども、やっぱり基本はやり方だと思うんですよね。どういう人が、どういうやり方でその授業の時間を活用していくのかというところで。

先ほど先生方の英検の取得率とか人数についてお話しいただいてそれを非常に知りたかったのでありがたかったんですけれども、やはり小学校の先生方にまず英検で何級を取れとかそういうことではなくて、ご自分が英語を楽しんでほしいというのがすごくあるんですね。ですから文科省ももちろん基本的な教材は作ってますし、たとえばテレビなんかでもマンガを使ったり、歌を使ったり、体操を使ったり色々なアプローチの仕方で子供たちの意欲をかき立てるような方法をやってます。そういう風に自分たちが楽しめる、そこに子どもを引き込んでいくというスタンスで授業時間を使っていただけたらなと思います。地域にいろんな関わりのある人材が眠っているかもしれません。ＡＥＡとかＡＬＴだけではなくて、たとえば国際結婚してらっしゃるご家族がいらっし

ゃるとか、子どもを留学させたいなと思っているとか、ホームステイにチャレンジしてみようとか。そういう方を活用して、特に３、４年の外国語活動については英語にこだわることもありませんし、とにかく成績がつきませんので、アプローチの多様性が実現可能じゃないかと思いますね。工夫をたくさんしていただいて、とにかく英語アレルギーにならない方法で、中学校に向けて進んでいってほしいなと思います。先生への研修を行うとおっしゃいましたよね。それも大賛成です。楽しい研修になると思うんですが、そういう頻度を上げて先生方自身もブラッシュアップしていただきたいなと思います。

教育長　本市の場合はこの夏も、直接文科省の方を呼んでこの会場で小・中学校の先生方にうまく働きかけていただいて。先生方の熱心さを感じまして、充実した研修だなと思いました。

委員の方々ご自身の受けた英語教育と今のお子さんが受けているものと変化はございますか。

委員　今子どもが受けている英語の授業はコミュニケーションに特化しているなというのを感じます。やはりそれは色々な反省から来ているのかなと思います。会話であったり、英語を使って何かを表現するという授業が多く取り入れられているのかなと。私自身は自分の反省を活かして子どもには一度は海外に行ってほしいと思っていますし、そう伝えています。

教育長　今は英語の中にコミュニケーションとかオーラルとかあって、多様な学びができるという部分はあると思います。

委員　受験英語とビジネス、日常英語というのは全然違うと思います。コミュニケーションツールというとたぶん「聞く」よりも「話す」。それからビジネスをするとなると「読む」よりも「書く」といく能力が求められるような気がします。それはたぶん能動的に自分を表現するということが必要だなと思うんです。ヒアリングはできるけどトーク、スピーキングはだめだという方もたくさんいますし、読めるんだけどレターを書けるかというと書けませんし。そこが日本人の限界みたいなところなのでどう超えるかというのは大切だと思ってます。

受験英語も私は必要だと思うんですが、しかし、コミュニケーション能力のためにまず話してみる、それを互いに聞きあって、あるいは手紙を書きなさいとか、５分のプレゼンテーションをするための原稿を書きなさいとかいうと、その勉強量は結果的にヒアリングにもスピーキングにも全部活用できると。そういったことを考えていかないといけないんじゃないかと思うんです。

私は鹿児島の定住人口をいかに増やすかというのがすごく大事なことだと思います。それにある意味一番自分は情熱をかけているつもりなんですが、流動人口を増やして六次産業化をしていって経済発展をしていくということをしないと鹿児島県は、鹿児島市はもたないと思います。だからといって流動人口だけで回る都市はないですから、そういう流動人口、六次産業をしっかりやることで定住人口を増やしていくということが望ましいストーリーかなと。

グローバル化というのは都市化の現象と結構似てて、世界がよいよね、都会がよいよね、となると羽ばたいた人は二度と帰ってこないと。そういうことの

不安をすごく持っています。相対的な順番で物事を考えて、熊本よりも大きくなろうとか、福岡よりも大きくなろうとかいうけど、逆説的に言うと熊本、福岡の真似したって、所詮はつくりものであって。相対的に同じような街づくりをしたって、鹿児島よりも熊本が大きいからよいよね、熊本よりも福岡が大きいからよいよねとなっちゃうんじゃないかと。相対的な街づくりよりも絶対的な街づくりというのが大切だと僕はずっと思ってるんです。

絶対的な街づくりというのはハードウェアかソフトウェアかというと、京都みたいな絶対的な建造物があるというのはよいですけど鹿児島にはそんなものはない。そうすると「絶対的な」というのは何かというと、地域に対する愛情だとか家族、土地の者に対する愛情、愛着しかないと思います。愛着を育む教育というのは徹底的に１８歳までにすべきだと思っているんです。その愛情というものがあるから、羽ばたいた時にも鹿児島基準でものを考えて、これ鹿児島で活用できないかな、とか、どこかにいっても最後はやっぱり鹿児島だよね、とか、そんな子どもたちが増えてくるような気がして、１８歳までの教育でどうやって地域教育をするかというのが大切だと思います。

英語もそうで、せっかく鹿児島によいものがあるから、よいものを英語で伝えるっていうようなことを子どものうちから何かできないかなと思うんです。それは理論とかっていうよりも、先ほど青少年の翼の話でも言ったんですけど、君たちは鹿児島の貴重な子ども大使なんだと。君たちは外国に行ったときにいかに鹿児島が素晴らしいかというプレゼンテーションをしてくれと言って。彼らに君は自然、君は歴史、をまとめておいでと。それを一生懸命勉強するということは、結局自分で鹿児島の勉強をして、プログラムの中で鹿児島の勉強をしていくと同時に鹿児島というものをグローバライゼーションしていく。地域から東京、地域から世界を見るという、鹿児島というところをグローバライゼーションするために自分が何ができるかということをもっていくプログラムかなと思ったりします。

そうすると英語でずっと、というよりも、鹿児島への愛着をなんとか伝えたいと考えることが必要で、例えばＡＬＴの先生に自分の家族のことを英語で伝えなさいというとか。英語はそのツールですから、「伝えたい」というときに家族だとか地域だとか鹿児島というものを入れて英語を使えないかなと思うんです。

今自分の会社もだんだんグローバル化せざるを得ないんです。鹿児島の需要はどんどん減ってきて、世界で野菜を売ろうったって鹿児島弁しかしゃべれないのに売れるわけがないです。しかしどんなにグローバル化しても鹿児島を動く気はないんです。鹿児島に軸足を置いて自分たちをグローバル化できるか考えていこうと。鹿児島で一生懸命英語教育を社員にさせればさせるほど、あるいは良い会社を見せれば見せるほどうちの会社よりもよいなと思って行ってしまう。それが鹿児島の現実だと思ってですね。そこで一番最初に大事なのは鹿児島に対する愛情だと思って。英語もツールである以上、ベースに鹿児島愛みたいなものがあるのがよいと思って今日その話をさせていただきました。

教育長　今までのお話も含めてですけど、門田さんは鹿児島メソッドを築いてほしいと。グローバル人材についても。創志塾なんかも改めてプログラムを見た時に子どもたちがＡＬＴに地元の観光案内をするとか色々な仕組みがありますけれども。総合教育会議では早い段階で外国に、文化に触れるという話がありました。

委員　そうですね。委員がおっしゃったように大きい会社とか大きい街に行くとなかなか帰ってこないのが現実だとは思います。鹿児島の企業で、企業に就職するという部分で現実的に入れる会社がたくさんあるかというと実際少ないと思います。現実的な選択肢が少ない中で、いったん外に出てたくましくなった人が戻ってくるのかというと、難しい。

そういう中でどうするかということを考えたときに、創志塾とか縦横のつながりで戻す方法も一つあるだろうし、もう一つ自分で会社に就職するという選択だけではなくて、自分で会社を興すと。外国などでいろんな違いを見つけてそのシーズを持ち帰ってそれが鹿児島を母なる場所として自分の会社を作っていかないことには始まらないだろうなと。そういう意味では起業家というのをどうやって育てるか。ゼロからたたき上げて自分の会社を興した人もたくさんいるし、まだ起業して５年１０年しか経たないのに５０億とかいう売上に達した会社もあるわけですので、そういう人たちもぜひ創志塾の講師に呼んで、会社に就職するだけじゃないんだと。逆にシーズを見つけて会社を興すという方法もあるんだと。あ、じゃあ大好きだから鹿児島でやろう、という人も増えたらよいんじゃないかなと。

そこにはお金が必要だと思うのですが、そのお金を銀行が貸してくれればよいですけどなかなかそう簡単にはいかない。じゃあ鹿児島市として創志塾の出身者にはこういうシステムでお金を貸与します、とか。そういう結び付けをしていかないとなかなか難しいと思っているところです。

教育長　英語、グローバル人材ということでしたけれどもその中でやはり他者理解という意味で人間関係づくりの部分も学校に原点はある気がするんですよね。

自己主張ができる、あるいは伝える力があるということで見ると原点にはやはり幅広いコミュニケーションという意味では、身近にもそういう国際的な問題、外国語に、文化に興味を持つという意味では、いろんな外国語活動、英語に限らず、教育活動の中にはそういうチャンスはあると思うんですね。先生方にはやはりその広がりをまず理解いただいて、そういったグローバル人材というものについての、幅広いご自身が持っている力もそこに生かしながらということで組み立てていかなければならないのかなと今日のお話を聞きながら考えているんですけれども。

委員　グローバル人材を育てるというのは非常に大事でして、教育的な視点からもそうなんですけれども、企業的にいえばグローバル人材というのは別に英語を喋れなくてもいいんです。極端にいえばインドネシアで仕事をするとなると、通訳がいればいいだけの話なんですよ。大事なことはグローバルな仕事をするかどうかというところだったり、グローバルな視点とかというところで。それ

がどうやって育まれるかっていうと英語だけやれば育まれるというわけではなくて、日本ではリベラルアーツの危機と言われていて、歴史とか文学だとかみんなそういうのを忘れている。文学部は人気がなくなるし、歴史学部だって人気はなくなるし、自然科学だって生物だとかいうのはバイオの方はいくけれどもお花とか動物とかってその辺りはだめだと。リベラルアーツがものすごく弱くなっているんですよね。昔の日本人というのはリベラルアーツをすごく大事にしていたんですけど、海外に留学した人も必ず自分の常識のなさに気づくんですよね。向こうの人たちはいっぱいそういう話をして、こういう本読んだかとか哲学の話とかいったってさっぱりついていけないと。何と自分は１８歳までにそんなことも勉強してなかったのかという壁にぶち当たるのが一つ。もう一つは日本について全然語れない。日本の歴史を教えてって言われるんだけど語れない。自分たちはそういうところをやっぱりベースに持っておかないと、グローバルな仕事というのはできない気がするんですよね。そこでやはり英語も大事なんですけどもリベラルアーツと言われるような、一般常識という言葉で少し下に、共通教育とか、一般科目とか、一般常識とか、そこの土台があるから良識ある人間が育っていくので、そこが非常に大事だと思うんですけれど。おっしゃるようにグローバル人材をつくるんだったらコミュニケーション能力をしっかり持っとかないと、語りもしない人間はグローバル人材にならないですよね。鹿児島におけるリベラルアーツとは何かというときに鹿児島の歴史だとか自然だとか。そして鹿児島で仕事をする以上、外に売るのはやっぱり鹿児島なんですよね。鹿児島を知らない人間が外で売るものを作れないだろうと思って。鹿児島のグローバル人材育成についてはやっぱり鹿児島をもっと理解して、鹿児島の魅力をしっかり自分のものにしてこれを世界に売ってやろうというのがあるのが最初かなと。それを売るためにツールとして英語は知っとかないといけないなというところで出てくるのかなと思います。

小学校の先生に全員準１級を取れというのは難しい話ですから、上手な人にそこは任せて、グローバル人材を育てるとはなんぞやというところで、むしろ何を使って子どもたちに英語を教えるかというところに心を割いてほしいと思うんですよね。

委員　今のお話はすごく共感するんですね。英語がまずあるんじゃないんですよね。どうしてもグローバル人材育成とかなって文科省がこういう風に動くと、とにかく英語英語って。それで何が変わるかっていったら、幼児英語教室がどんどんできる。早くから、幼稚園の頃からそういうところにいかなきゃ負けちゃうよ、小学校入ってからじゃ遅いよ、みたいな。そういうのってすごくおかしいと思うんですね。色々個人の自由なのでそこは何も言えないんですけれども、基本とても大事なのはさじ加減なんですね。まず外にぶち当たったときに初めて自分の欠けてるところがぐっときて、知らなきゃ、知りたいって。たとえば日本のこととか鹿児島のこととか。外国の人が知りたいってきたときに話ができない、自分も知らない。ということ、現実に目覚めて初めてすごく勉強しようとか欲求が出てくるんですね。どうしてこうなんだろうってことが。自分が

内側から学ぶ意欲も出てくるわけですよね。それが一つあるので、今のところ起業しようとかなんとか意欲がなくても、とりあえず一回は外に出てみたら、みたいなね。出てみて初めて足りないところにぶち当たるっていうところもあるんですけど。

それから、小さいうちから郷土のいろんなことを教えるというか触れるような体験型の形で導入していって、そこから面白いからこれをみんなに知らせたいな、という発信型の方に行くかっていう、その両方の兼ね合いっていうんですか、最初おっしゃったように外のいいところをいっぱい知って、大きなところをいっぱい知るともう帰ってこない、ということをちょっとおっしゃったんだけども、たとえば私自身が県外の出身なんですね。で、自分の故郷の良さというのを知ったのは鹿児島にきて何十年も住んでからです。全然よいとは思ってなかったです。悪いけど。全然見えてなかったんです。鹿児島に来て、鹿児島の方って何かあると「西郷さん」っておっしゃるんですよね。えーって、どういうことって思いながら何十年も住んでいるうちにそれと比べて自分のふるさとは何なんだろうって。そういうことが初めて実感を持って分かってきて、もっと知りたいし、そうすると今ネットの世界ですからどんどんコミュニケーションが取れるわけですよ。自分の先輩後輩とか地元に残ってる人とかね。どんどんコミュニケーションが取れて絆ができて、住んでいなくても、ちょっと戻るとネットワークに入れちゃうんですね。そういう形ですごくふるさと愛が育ったんです。外に出て初めて分かる地元の良さがあって。だから鹿児島の人も外に出て、あっと思って戻られる方がいてもおかしくないし。そこの兼ね合い、引っ張られていってしまって、門田さんのお話も伺ってると、家業がなかったらこの方戻ってきていないんじゃないかなと。そこの兼ね合いがすごく大切で、外に出て初めて良さを知るんだけれども、戻れるか戻れないか、戻る選択をするかどうか。そこのところで委員がおっしゃったように起業も一つの魅力をね、公的にもバックアップするような体制ができていると、ちょっとチャレンジしようかなって帰ってくるとかね。そういうこともあるのかなと。英語教育については、小学校に入ってくる英語で英語嫌いにならない、英語アレルギーさえ作らなければよいかな、という気持ちで。小学校でやったからすごくグローバルになったとか英語ができるようになったとかを求めるよりも、むしろアレルギーにならないで、面白そうだな、とちょっとプラスの方向に引っ張ってもらえるぐらいの方が目指す方向性としてはよいのかなと思っています。

教育長　両部長からも一言お願いします。

事務局　確かに英語教育となると私も英語が苦手な口で、どちらかというと理科系の方に行ったんですがそれは英語ができないから英語の比重が低い理科系に行ったというところなんです。さきほど課長が言ったような考え方をするから英語が口から出てこないんだなという。根本は地元にどうやって帰ってきてもらうかということからすると、委員がおっしゃるようにどれだけ愛着を持つかというところなんだろうなと。そのきっかけがどういった形なのかは外に出てなのか、そこにいる中でも分かるものはあるのでしょうし、いろんなきっかけが

あるんでしょうけれども。その後起業の支援の話になってくると、市行政全体のところですから言い方は悪いですけれども、限られたお金をいかに無駄にならないように効率的に使うかというのは市側が考えていかなければならないんだろうと思います。子どもたちにどんな根を植え付けていくのか、という点からすると教育が非常に大きい部分を担っているんだろうなというのは思うところです。

事務局　英語嫌い、英語アレルギーを作り出さないようにというところで、たとえば絵の指導を小さい子どもにするときに、「上手だね」「下手だね」という評価をしてしまいがちですけど、そうすると広がっていかない。「面白いね」「格好よいね」とか肯定的な評価をすることによって絵への関心が高まっていって充実して楽しくなっていくと。それと一緒で、コミュニケーションツールとしての英語を目指すのであれば、「今言ってること分かるよ」とか、「今言ったのはどういう意味なの」とかそういう返しをする教室であったらよいな、と思います。私がイタリアに派遣されていた時は、言葉として英語を使う必要はなく、イタリア語を勉強すれば現地の方ともコミュニケーションができると。日本人が周りに誰も住んでいないところに住んでいたのですが、耳が慣れてくることによって現地の方々が言っていることが分かってくるという経験をしましたので、自分が偉くなるために、とかよい成績を取るために、という目的で外国語を勉強すると挫折も味わうので、鹿児島に住んでいる私たちが鹿児島の良さを人に自慢できるようなツールとしての英語でなければならないのかなと感じます。

～　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～

８　その他

教育長　それでは、最後に、事務局からありますか。

事務局　次回の日程のご案内をいたします。

２月の定例会は２月１６日木曜日で、１８時から１９時１５分まで予定しております。場所は、教育委員会室です。先日お願いしましたとおり、夕方の開催となりますが、よろしくお願いいたします。

９　閉　会

教育長　それでは、以上をもちまして、本日の定例会を終了させていただきます。

【以上】